

山村をフィールドとした環境学習プログラムの開発

～ 文化体験に焦点を当てて ～

環境教育湖沼実習センター 0720 青木明弘

1. はじめに

文化とは「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」と広辞苑（第5版、1998）に記されている。つまり、文化とは「人と自然とのつながりの上に存在するもの」と言える。

筆者は「環境学習（環境教育）」とは「つながりの学習」であると考え、「環境学習」における「環境」には、山や川などの自然そのものだけではなく、山と自分とのつながりや、川と自分とのつながりが含まれる。それゆえ、「つながり」に気づくための「学びの場」や、「つながり」を大切に思える「学びの場」を提供することが重要なことと考える。

以上のことから本研究では、「つながりの学習」である環境学習の素材として、人と自然とのつながりの上に存在する「文化」の体験に焦点を当てることにより、自分たちの文化（人と自然とのつながり）に興味と誇りを持って、今後の地球環境を考えていくことのできる人間の育成を目指した環境学習プログラムの開発を行なうことを目的とした。

2. フィールドの選定

本研究では、環境学習とは「つながりの学習」であるという観点から、子どもたちが「学ぶ空間」自体に豊富な「つながり」が必要であると考え、その空間に「近年の開発が及んでいない空間」を提案した。その理由には、自然界の「つながり」が豊富であること、そして時間軸で見たときに、多くの人がある空間に関わってきたという「つながり」が豊富であることが挙げられる。このような、「つながり」が豊富な空間を、環境学習プログラムによって「学びの場」へと変換し、学びを創り上げていくことに大きな意味があると考え。以上が、本研究のフィールドを山村にした理由である。

そこで本研究では、近年の開発が及んでおらず、昔ながらの空間が残っている高島郡朽木村および今津町椋川を、環境学習プログラム実施のフィールドとして選んだ。いわゆる日本の原風景と呼ばれる風景がそこにある。

3. 文化体験に焦点を当てた環境学習プログラム

本研究のフィールドである朽木村および今津町椋川において聞き取り調査を行い、それをもとに、①「物の文化」と「心の文化」の体験 ②文化体験による子どもたちと現地の人たちとのエンパワメント に焦点を当てた2泊3日の体験型プログラムを考案し、両地域において試行実践を行った（表1）。

表1. 実施した2泊3日のプログラム

1日目(8月28日(火) 曇り時々雨)
・「わら草履作り」
・「草木染め&葉草摘み」
・「鎮守の森」
2日目(8月29日(水) 晴れ)
・「ちまき作り」
・「ホームステイ」
3日目(8月30日(木) 曇りのち雨)
・「宝物マップ作り」

実施日:2001年8月28日(火)~30日(木)

参加者:13人(男4人、女9人)

<学年別内訳>

小5(4人) 小6(2人) 中1(3人)

中2(3人) 中3(1人)

3.1 「物の文化」と「心の文化」の体験

「物の文化」と「心の文化」の体験によって、子どもたちが「文化」に興味を持ち、「文化」の根底にある「人と自然とのつながり」や、自然からの恩恵に対する感謝の気持ちに気づくことをねらいとした。筆者の考える「物の文化」と「心の文化」の関係を図1に示す。

「わら草履作り」や「草木染め&薬草摘み」といった「物の文化」の体験によって自然からの恩恵を学んだ。「物の文化」の体験を、自然からの恩恵に対する感謝の気持ちにつなげるため、人々の感謝の場である「神社」においてアクティビティ「鎮守の森」(写真1)を行なった。ここで子どもたちは感謝の気持ちを学んだ。

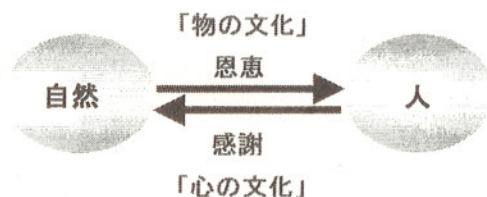


図1. 「物の文化」と「心の文化」の関係



写真1. 「鎮守の森」

3.2 文化体験による子どもたちと現地の人たちとのエンパワメント

「物の文化」と「心の文化」の体験で芽生え始めている「文化」に対する興味を、「ちまき作り」(写真2)、「ホームステイ」を通じた現地の人たちとの交流によって膨らませ、自ら尋ね、自ら学ぶ姿勢へと導くと同時に、現地の人たちとのエンパワメントの関係作りを目指した。

また、「ホームステイ」の中で、自分が見たり聞いたりした「宝物」を「宝物マップ」という形でまとめた。



写真2. 「ちまき作り」

4. 試行結果および考察

図2から、子どもたちは「わら草履作り」や「草木染め」、「鎮守の森」といった「文化体験」を楽しみ、子どもたちの心の中で「文化」に対する興味・関心が生まれはじめたと捉えられる。しかし、「文化」の裏側にある「自然からの恩恵」や「自然への感謝」といった「自然とのつながり」を、子どもたちにきちんと伝えることはできなかった。自然とのつながりの深い文化を身近に感じている人たちの体験談を中心としたプログラム企画や、感謝の気持ちを周りとは分かち合えるようなプログラム実践が、今後の「物の文化」や「心の文化」の体験の課題となる。

「ちまき作り」や「ホームステイ」は、表2からもわかるように、子どもたちだけでなく現地の人たちにとっても、新たな気づきや学び、喜びにつながり、過疎に悩む山村を活気づけることに貢献できたと考えられる。

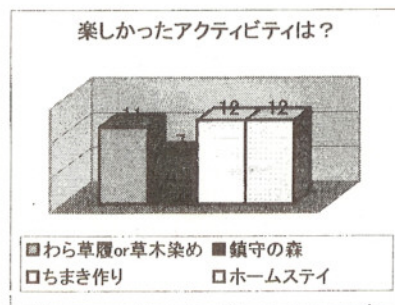


図2. 子供たちの感想の集計

表2. 現地の人たちの感想例

「子どもたちが珍しそうに見たKさんの家をはじめじっくり見てみた。同じ集落なのに今までじっくり見たことがなかったのに気づいた。今になって新しい発見をしたような気持ち。ただの家ではなく、文化財として見直した。」
「他人の子を泊めるという経験はあんまりない。孫も少ないから楽しい経験をさせてもらった。」